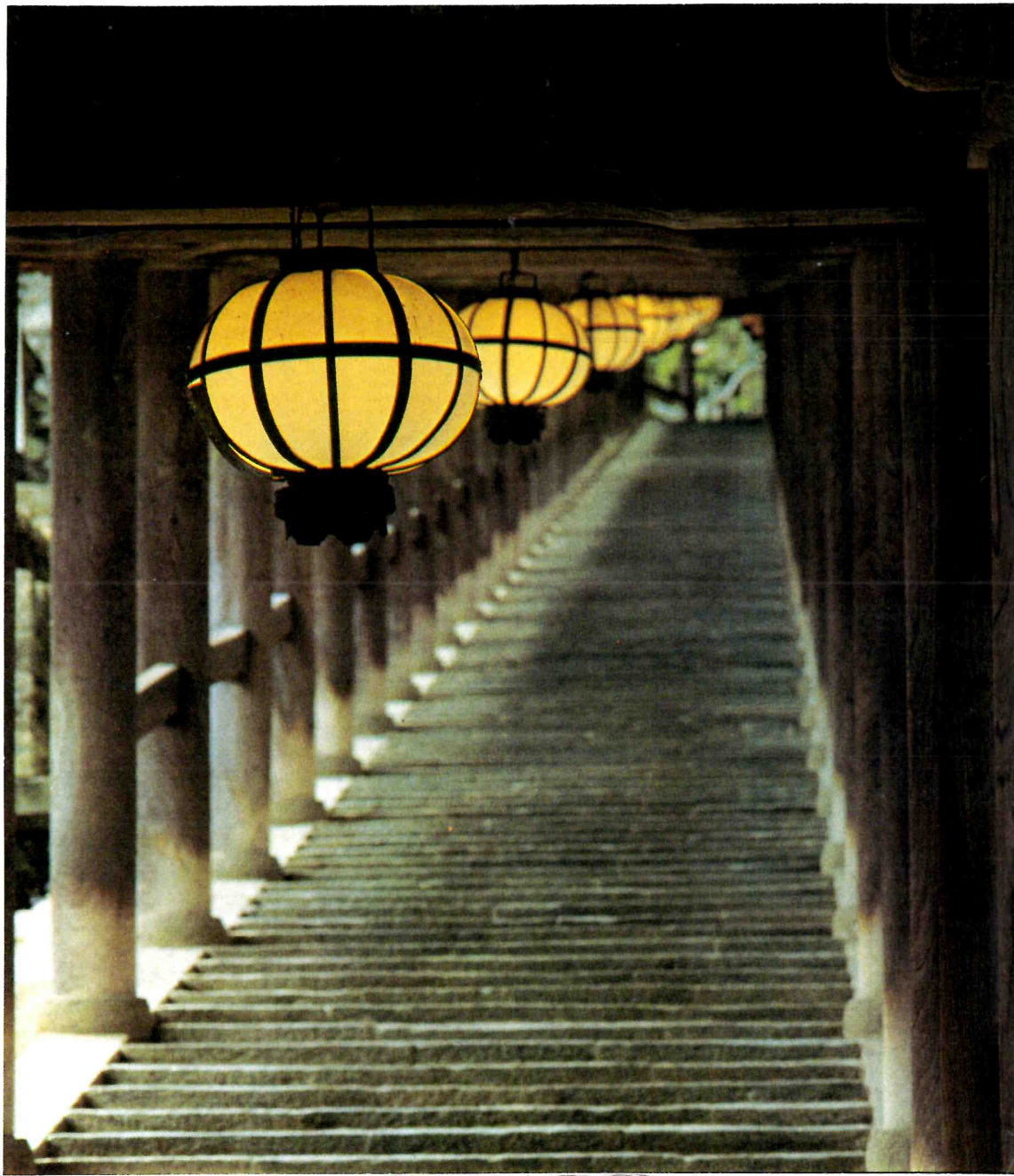


5.443P

カラー

・右頁下半分に、下方へ↑
はみ出して大きく
掲載下さい。

・出来子だけ、朋子く
お願いします。



カ
ツ
↑

長谷寺・室生寺
田中昭三 見聞主
地図有る。

登廊
登廊

132G

142G 写真図版 800 長谷寺の~~登廊~~登廊

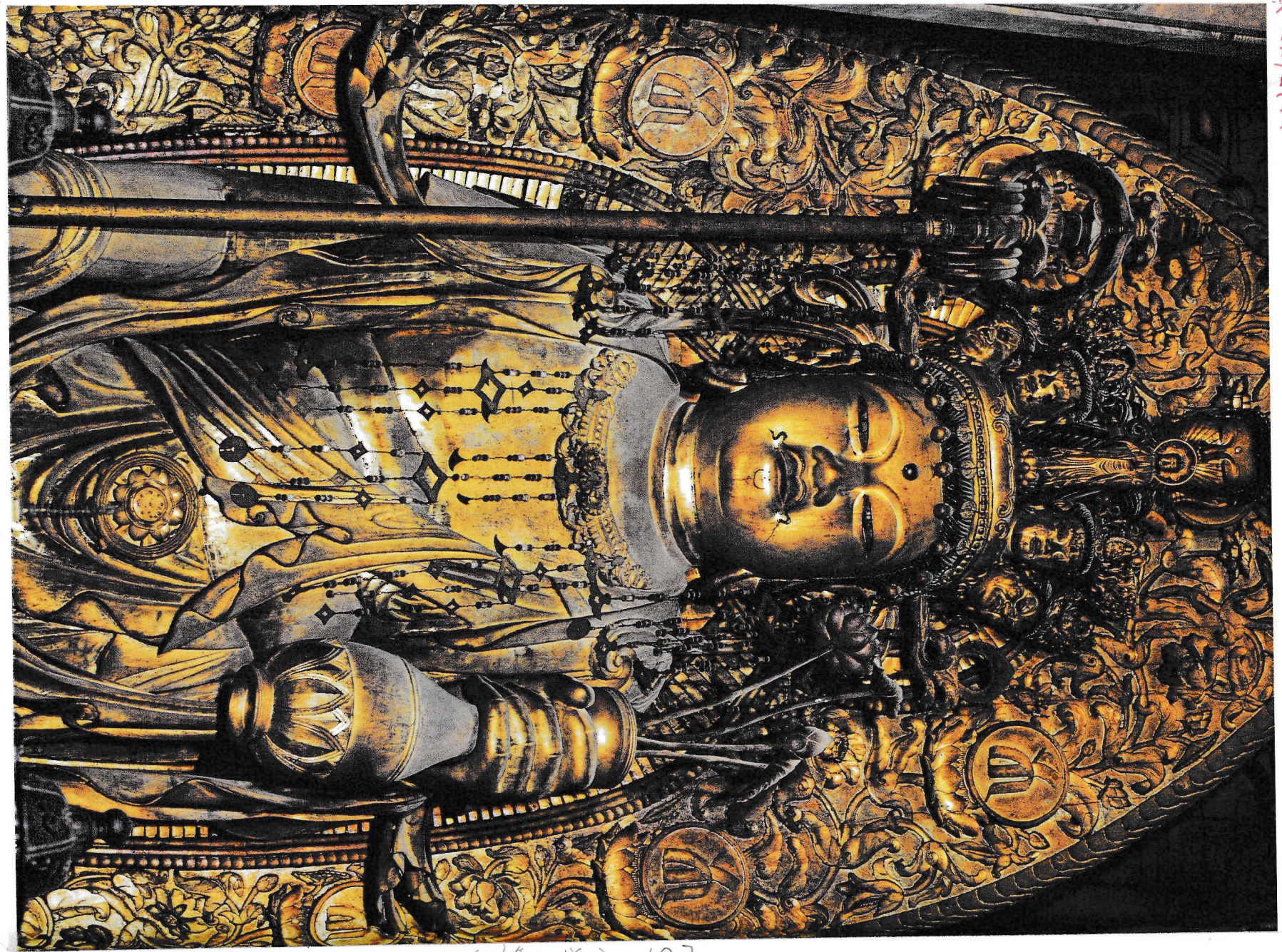
『長谷寺』竹西寛子・川田聖見、淡交社、昭和55年1月20日発行、No.8 参照、101P

カラー
左頁全圖に、はみ出し
大主と載せ

・ 目蓋をのぞい
ぶかに172
明子とち願
はず。

5.444^p

地蔵と
観世音と
4葉散り
582頁
-1/3
16p
19p



1409

1309

写真図版 801
長谷寺十一面観音像 (像高10m余り、重文、木造)

古色大和路 入江泰吉
入江泰吉記念奈良市写真美術館 平成24年10月29日
発行 327頁参照
右手に錫杖と念珠、左手に水瓶を持、713。(第13巻464頁参照)

344

おける泊瀬・清水の地は、人と人とが邂逅（めぐりあい）をする奇遇の場所として特筆されている。（小野小町攷）

小林茂美、桜楓社、二四〇頁参照）

そして、……とても信じ難いようなことではあるが、この「長谷寺」で、小町はついに、遍昭とめぐり会った事

の「長谷寺」で、小町はついに、遍昭とめぐり会った事
に想像される。

*

遍昭（良岑宗貞）は、仁明天皇崩御直後の嘉祥三年（八五〇）三月二十八日に出家し、石上寺、清水寺等、養ひとつをうち着て、世間世界を行き、この斉衡二年（八五五）初夏頃には、泊瀬の御寺「長谷寺」に於て修行し

ていたのであろう。

●群書類従本『遍昭集』は、——仁明天皇の崩御後一年が過ぎて御ふくぬぐ時に、遍昭が、

みな人は花の衣になりけり

苔のたもとよかはきだにせね

と歌い、そのちいづこともなく歩き侍て、「長谷寺」に至ったと述べており、このあとに、小町と遍昭の二人の贈答歌を載せている。

●なお、『大和物語』は、遍昭が世間世界を行いて「長谷寺」へやってきた後に、仁明天皇の御喪（一ツ年）

5.445^p

があげたと記述しているが、——わずか一年間で、世間世界を行くあるけるわけはなく、話の筋として無理があるように思われる。（『大和物語』一六八段参照）

■この物語では、

遍昭は、石上寺・清水寺など世間世界を行き歩いた後に、長谷寺へやってきた

と考えてみたい。

■そして予め述べると、

遍昭はこの直後の斉衡二年（八五五）五月、徒兄弟にあたる右大臣藤原良房の配慮によって比叡山へ登る

ことになる。（「慈覚大師伝」。「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、二二七頁参照）

斉衡二年四月当時、遍昭は比叡山へ登る日を前にして、……俗世間をなつかしい思いで見ているのではなからうか。

さて、「長谷寺」へやってきた小町は、何とも不思議なことに、……またもや、あのなつかしい声を耳にした。

（以下、「遍昭集」参照）

籠っている局のかたわらに経を読んでいるのは誰だろうかと思つた小町が、連れの人をやって見てこさせたところ、「以前、清水寺で）養ひとつ着ていたあの法師が、——さ

すがに(優れて)いるだけのこと(はあって)、艶やかな姿をし
て隅の方においでになりました」

と言った。

●おそろく、世間世界を行(き)いた後に「長谷寺」へ来

た頃には、僧位も上(あ)がって、遍昭はかなり立派な衣服を着

用するようになっていたのである。(第41回) 遍昭(参照)

●このところ、『遍昭集』には、

「みのひとつきるほ(う)しのさすかにあてやかなるなむすみ

のかたにゐて侍といひければ云々」

とあるが、しかし決して、

〈衰ひとつ着る法師が、艶やかに隅の方に居た〉

というわけではあるまい。

●この物語では、

〈清水寺で衰ひとつ着ていた法師が、長谷寺では艶やかな

姿をして隅の方に居た〉

と解したい。

耳をたてて聴くに、その僧侶の声は、いと尊く、心に深

くしみじみと滲み透るようであった。

〈ただ人ではないわ。少将良岑宗貞様は、いずれ大徳(大

きな徳のある人)になられる(こと)でしょう〉

小町は、そう思った。そして、

5.446p

〈私がこの長谷寺に来ていることを、どうにかしてお知ら
せしたいわ。どう言ったものかしら〉

と思索した。

新しく歌を作(お)って贈(お)ろうかとも思った。

しかし、それでは、

〈あの時、石上寺でお会(あ)いした私小町が、この長谷寺に来

ております。お話など致(いた)しとう存じます〉

ということが、——端的(たんてき)には、少将良岑(遍

昭)様に伝わらないに違(ちが)いない。

そこで小町は、

「私はいま、この長谷寺に来ております。あなた様のお声

を聞く時はいつも寒(さ)うございました。この季節、日中は暑

いくらいですが、しかし山の中(こと)、晩になると寒(さ)うご

ざいましょう。少将良岑様のお声が聞えてまいりましたの

で、このようにして筆をとっております。大変願(たいへん)もしくも

期待しております。どうか御衣(みぞ)一つお貸(か)し下さい」

とて、

このみてらになん侍(はべ)いとさむきを御(お)こゑ侍(はべ)れはい

とたのもしくなんみそひとつかし給(たま)へ

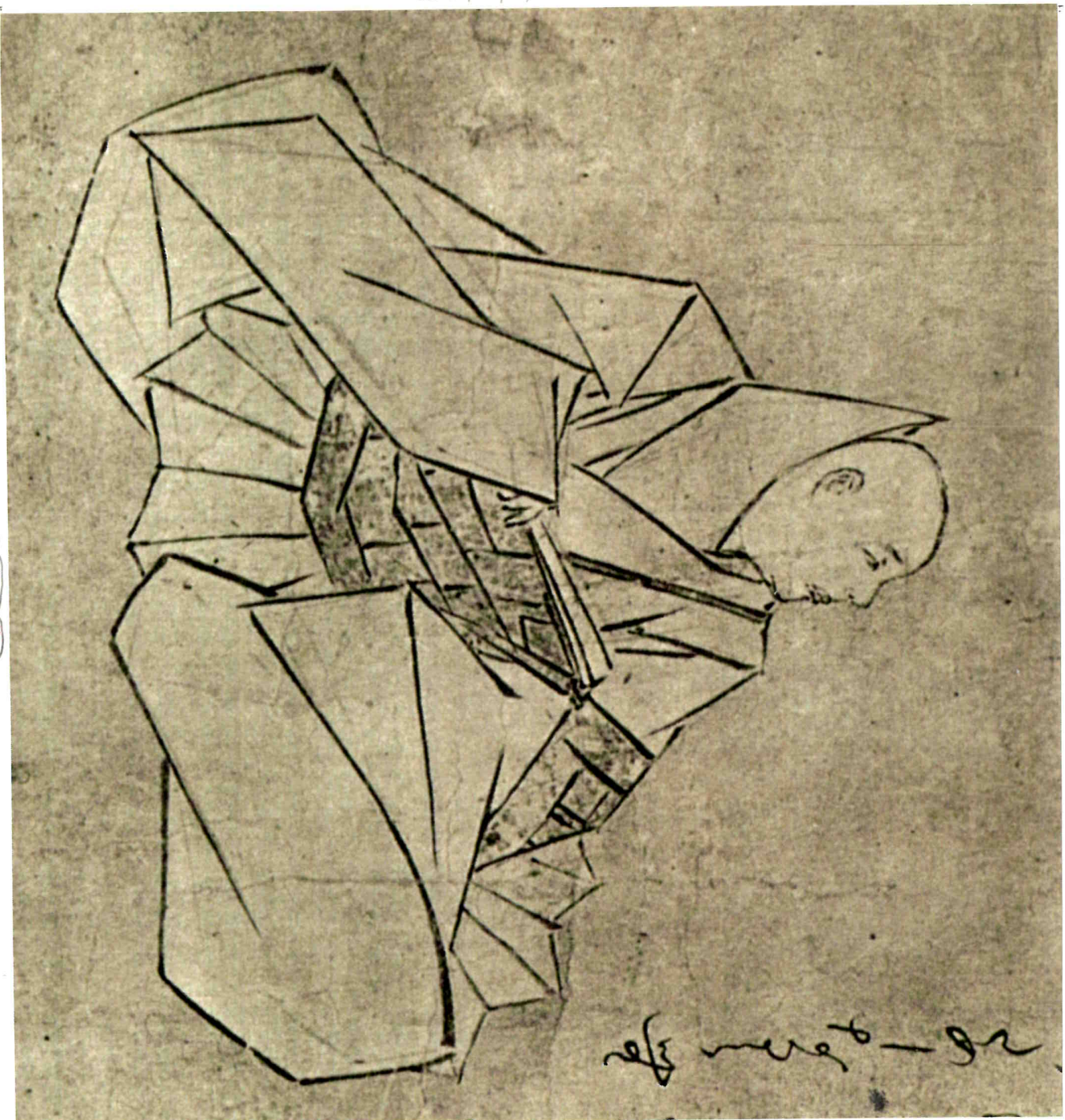
いはの上にたひねをすればいと寒(さ)し

苔の衣を我にかさん

石上寺 54.05
清水寺 54.40

・カラーで印刷して下さい。
 ・左頁の下半分に、大きくはみ出、掲載下さい。

105P



5.447P

105

1404 第54回 通昭 (上ヶ置本三十六歌仙繪) ^{あやたみはん}

1304

『日本繪巻物全集』三十六歌仙繪 角川書店、昭和42年12月30日発行

43頁参照

(*) 置の上に座、人物を描いてゐるので、^あ上ヶ置本の名がある

古今和歌集 口絵 日本繪巻物全集 角川書店、11頁に上ヶ置 (Age datami) とある
 上記巻の終の下に解説がある。
 ⑤5496 徳正編昭

と書いて届けさせた。

すると遍昭は、いまままだ少し変えて、

山ふしの~~昔~~の衣は只ひとく

かさねはうとしいさふたりねむ

と書き送ってきた。

「まあ、やはり少将良岑宗貞様なのね」

喜んだ小町は、

〈あんなにも親しく言葉を交わした間柄なのですから、ぜひ、もう一度会ってお話をしたいわ〉

と思い、胸をときめかせて訪ねていった。

やがて、艶やかな姿の僧がやってきた。

僧位の上がった遍昭は、こうした時に多少なりとも融通

がきくようになっていたのかも知れない。

四年前に、祖父壘と石上寺を訪れたこと。忘れられない

贈答歌のこと。祖父壘が死去したこと。宮中に上がったこと。

清水寺で懐かしいお声を聞いて、「岩の上に旅寝をす

れば」の歌を差しあげたこと。返歌を頂いて嬉しかったけ

れども、お会い出来なくて大変心残りだったこと。等々、

小町は語った。

可憐な薔がふくらんで、いままさに美しい花になると

している風情の小町のおしゃべりを、遍昭はにこにことし

ごませる柔らかな優しさがあった。

小町は、その穏やかな微笑みにスッと引き込まれていく

ような得もいえない安らぎを感じた。そして、言葉では言

い表わせない心地よい嬉しさを覚えるのだった。

小町はさらに、宮中でいろいろな珍しい儀式のことや、

楽しかった出来事などを、おもしろげに語った。

「私、昨年十一月の新嘗祭の五節の時にね、美しい着物を

着て、皆が見ている前で舞いを舞ったのよ。初めてのことに

だったから、間違えないようにするのが精一杯で、まるで

フワフワした雲の上で踊っているような気がしたわ」

*

初瀬川上流の観音山中腹に巍然と聳える「長谷寺」で遍

昭と小町とが再会したのは、もしかしたら、四月の上弦の

月(半月)が西の空に傾きかけていた頃のことであつたか

も知れない。

時折、雲と雲との間あたりがぼくと明るくなって、そこ

に月があるのだと知れるような、……そんな宵のことであつ

たろうか。

天空を吹き渡る風に乗って、雲が流れてゆく。

小町のたわいもない愛らしい話を聞きながら、……遍昭

は、宮仕えしていた時に作った舞姫の歌を思い出して

天つ風雲の通ひ路吹きとめよ
をとめの姿はし見るべく

この歌は、五節のころ舞姫を見て詠んだものである。

(群書類従本「遍昭集」)

つまり、良岑宗貞は、陰暦十一月中の卯の日(新嘗祭・

大嘗祭の日)を中心として繰り広げられる五節の時に舞い

終えて退出する舞姫を、空を飛んで帰る天女に見たてて歌っ

たのだった。

なお、『遍昭集』にあるこの歌が《原形》であろうとい

う。(古今和歌集「日本古典文学全集、小学館、三三三頁、注

記参照)

〈ああ、あの時の情景が目に浮かぶ〉

懐かしい思い出が、遍昭の胸中に華やかによみがえった。

そんな記憶のなかの舞姫の姿が、——いつしか遍昭の目

には、小町の清楚な美しさと重なって見えていた。

天に近い初瀬の山に、天女のように麗しい乙女がいる。

なんとまあ優雅なことよ。

遍昭は、小町の姿を、まぶしそうに見つめていた。

心に浮かぶままに、遍昭は歌った。

5.449 P

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ

をとめの姿しとどめむ

(「古今和歌集」卷十七・八七二。「小倉百人一首」)

天つ風よ。雲をたくさん吹きつけて、雲の中にあるとい

う通路を遮断しておくれ。そしてしばらくの間だけでもい

いから、天上界へ帰ろうとする乙女の姿をここにとどめ

て、私にゆっくり見させてくれないか。

小町は、その遍昭の歌に、うっとりした。

〈何という美しい歌なのでしょう〉

天女にたとえられた小町は、さすがに嬉しかったが、……

面映ゆくもあつた。

「いいえ、そのようなことをおっしゃってはいけません。

私、どうしてもいいか戸惑ってしまっし、お月様もたいそう

お困りになるわ」

頬をほんのりと赤らめながら、小町は歌った。

天つかせ雲ふきはらく

久堅の月のかくる道まとはなむ

(群書類従本「小町集」)

それは、乙女の恥らいをふくんだ、好感のもてる歌だった。

「いやはや、これは参った。——それにしても久しぶりに、

心ときめくひとときを過ごしました」

遍昭と小町とは、こうして別れた。
打てば響く遍昭と小町の応答は、一人にとって、何事に
もかえがたい楽しい限りのものであった。

次の日の朝のことであつたらうか。

「こんなにも親しく言葉を交わした間柄になつたのです
もの、……もう一度お会いして、お話をしたいわ」
小町はそう思い、遍昭を訪ねていった。

しかし、どうしたというのだろうか。遍昭はもはや、か
き消えたように失せてしまつていた。（「遍昭集」参照）

遍昭はこの頃、比叡山に登るための準備にあわただしい
日々を過ごしていたのであろう。

先に述べたように、遍昭は、斉衡二年（八五五）五月、
従兄弟にあたる右大臣藤原良房の配慮によつて、叡山に登つ

たのだつた。（慈覺大師伝）
そして遍昭は、後にはついに僧正にまでなつたという。

（「小野小町歌」小林茂美、桜楓社、二二七―二三〇頁参照）

小野貞樹

文徳天皇（仁明天皇の第一皇子。八二七―八五八。在位八
五〇―八五八）の政治は、母（仁明天皇后順子）の兄

藤原良房を中心にすすめられた。（「日本史辞典」東京創元
社〈文徳天皇〉。「皇室大百科」朝日通信社、二二〇―二頁）仁
明天皇（文徳天皇）参照）

藤原良房は、文徳天皇の即位後、外戚として権を得、右
大臣・左大臣をへて天安元年（八五七）太政大臣に進んだ。

（「人名大事典」谷山茂、むさし書房〈藤原良房〉。他参照）

文徳天皇が天安二年（八五八）八月に三十二歳で崩御さ
れると、藤原良房の娘明子が八五〇年に生んだ文徳天

皇の第四皇子、性仁親王が、九歳で皇位を継承された。清
和天皇（八五〇―八八〇。在位八五八―八七六（天安二―貞

観一八）である。（「日本史辞典」東京創元社〈文徳天皇〉
〈清和天皇〉〈藤原良房〉。「広辞苑」参照）

ここに、藤原良房は、清和天皇の摂政となつた。臣下と
して、最初に摂政の地位についたのだつた。

その後、藤原良房は、貞観八年（八六六）の応天門の変
に際し巧みにこの変を利用して大伴（伴）・紀の両氏を政

界から追い、藤原氏の摂関政治の基礎を確立する。（人名
大事典）谷山茂、むさし書房〈藤原良房〉参照）

尚、『応天門の変』の概要について、予め述べておくこ
とにしよう。

「貞観八年（八六六）春、閏三月十日の夜、朝堂院の正門

である『応天門』が燃え上がり、西そのの樓鳳楼、翔鸞楼、大納言伴善男は、左大臣源信に容疑をかけ、その屋敷に逮捕の兵をさし向けようとした。

大政大臣藤原良房は、すぐに参内し、清和天皇にこの事件への対処方を問い合わせたが、天皇の関知しないことだ

という返事だったので、さっそく逮捕をやめさせた。

そして半年後の九月二十日、判決が下った。伴善男らの放火とされ、伴（天伴）、紀西氏あわせて八人が遠流と

なった。

その中には、善政をした国司として名高い肥後守紀夏井（播磨介・讃岐守・肥後守を歴任）もいた。

肥後守紀夏井が土佐国へひかれて行く道の西側にならん

だ人民は、声をあげて泣いた。

伴善男は、伊豆に流されることとなり、護衛兵に囲まれ

て都を後にした。

二人とも、その後の消息については伝えられていない」

という。（日本の歴史③平安貴族、読売新聞社、七一〜七

四頁。「日本史辞典」東京創元社〈応天門の変〉（参照）

*

■ところで、

①平安時代の朝堂院の正門『応天門』は、周初頃の宮室

5.451^P

第5図・第6図（参照）

の正門『応門』に由来しているのかも知れない。（四捨の

②また、朝堂院の正門『応天門』の西そでには、周代後半

から後の様式にならって、『闕』すなわち『楼観』（樓鳳

楼・翔鸞楼）が立てられているのではなからうか。（四捨の

と想像される。

■あえて述べると、

〈平安時代の最高権力者達は、周初頃から以降の洛邑・

成周（洛陽）の移り変わりを知悉していて、……平安宮の

朝堂院の正門を、『応天門』と呼んだのだらう〉

と思われる。（第十八章〈応天門〉の項において既述。「三代

実録」清和天皇の貞観十三年十月二十一日条参照）

*

小野貞樹が肥後守となったのは、応天門が炎上した清和

天皇の貞観八年（八六六）の六年前、——貞観二年（八六

〇）正月十六日のことであった。（三代実録）

ではここに、『三代実録』から、「肥後守」の記事を抜粋

してみよう。

■貞観元年（八五九）十二月二十一日条。

「正五位下行肥後守藤原朝臣冬緒爲^二右中弁^一」

新ヤ(1)-100頁
母古朝の11登田密

180±に解説

尚、二十五年後の光孝天皇の元慶八年（八八四）三月九

日条に、

「大納言正三位藤原朝臣冬緒（兼彈正伊）爲ス

という任官記事があり、元慶八年当時、藤原朝臣冬緒は生

存していた、ということが分かる。

■貞観二年（八六〇）正月十六日条。

「従五位上行大宰少貳小野朝臣貞樹（肥後守）爲ス

■貞観二年十一月二十七日条。

「従五位上行大宰少貳藤原朝臣眞數（肥後守）爲ス

尚、十年後の貞観十二年（八七〇）二月十四日条に、

「散位従五位上藤原朝臣眞數（刑部大輔）爲ス

とあり、藤原朝臣眞數は十年後も健在だったことが分かる。

■貞観七年（八六五）正月二十七日条。

「散位従五位上紀朝臣夏井（肥後守）爲ス

■貞観八年（八六六）九月二十一日条。

「従五位上行肥後守紀朝臣夏井（配）土左國（昨）年
の貞観七年拜ス肥後守。母石川氏聞テ而テ哭ク之ヲ。人
問ト其故ヲ。答曰ク。吾聞ク。肥後風俗。國宰至清。身必ス
不レ全（其）。吾子其不レ終乎（意）。……遂ニ託ス身ヲ大納言伴宿称

善男（應）。應天門火。云々」（後述）

■貞観八年（八六六）十一月二十九日条。

110

5.452P

「従五位上行大宰少貳在原朝臣安貞（肥後守）爲ス

すなわち、小野貞樹が肥後守であったのは、貞観二年

（八六〇）春正月十六日から、同年の冬十一月二十七日以

前迄の、……極めて短い、一年足らずの期間だったことが

分かる。

そして、肥後守となった小野貞樹の前途には、暗雲が待

ち受けていたようだが、——このことについては、追って

述べたい。

*

因みに述べる、肥後国には、『木葉山』（別名、靈雨山）

という麗（美）な山（三八三頁）がある。（図鑑の第12図参照）

合志の七国神社から見て西方約九キロに聳える木葉山の麓

には、約一三〇〇年前に造営されたという春日神社があり、

山頂には靈雨山神社がある。（『帝國地名辞典』大田爲三郎、

名著出版〈木葉山〉。「熊本の伝説」荒木精之、角川書店、七

頁。「熊本の山」今江正知、熊本日日新聞社、二四頁〈木葉

山〉。五万分之一地図参照）

木葉山は菊池盆地の入口にひとときね高く峙（た）つ山だから、……

古来菊池を本拠地としてきた中臣氏が、この山を崇拝して、

春日神社および靈雨山神社を創建したのではなからうか。

なお、『新・やまと物語』の本文中において詳述するよ

鎌倉時代

新・巻96P

（注）

「菊池盆地を中心とする一帯が、そもそもの中臣氏の本拠地だったのだろう」
と想到される。(枚岡神社・春日神社あたりの地勢、他参照)

さて、たぶん清和天皇の貞観二年(八六〇)秋のことだったであろう。

その時、小町は二十歳であつたらうか。

新たな任地肥後国で苦勞の絶えない慌しい日々を過ごし、
ている貞樹のもとから、京の小町へ文が届いた。

それは、走り書きの便りだった。

その文面を見た小町は、……すこしばかりすねてみせて、

こう歌った。

今はとてわが身時雨にふりぬれば

言の葉さへに移ろひにけり

返し

人を思ふ心の木の葉にあらばこそ

風のまにまに散りも乱れめ

私はもう秋(厭)の時雨(通り雨)にかすんだように、

あなたの記憶のなかでは古びてしまったのでしょうか。お心

が冷たくなつたうえに、お言葉までが秋の木の葉同様に変わ

5.453 P

わり果ててしまったのですね。

とんでもない誤解です。あなたを思っている私の心が、

かりに木の葉であつたならば、風に吹かれて散り乱れもし

ましようが、私の心は木の葉と違つて決して散つたり乱れ

たりせずただあなたを恋しく思っているのです。

この贈答歌は『古今集』巻第十五、恋歌五に収められて

いるものである。

なお、貞樹の返歌の「こそ」の結びは末句の「め」であ

り、「あらばこそ」の仮定法の裏に「木の葉でないから散

り乱れない」(あり得ない)の意が隠されている。(古今和

歌集「日本古典文学全集、小学館、三〇二頁の注。「広辞苑」

〈あらばこそ〉。他参照)

なるほど、小町の歌には、「わが身時雨にふりぬれば」

とある。

しかし、だからといって言葉通りに、「小町がかなりの

年になつた時の歌だ」と解す必要はあるまい。

恐らく、

「肥後国に赴任した小野貞樹からのたよりは、何故かしら

途だえがちなのに、……ひさしぶりに届いた文は粗雑で、

誠意がこもつておらず、時ばかりが移つてゆく」

といったほどの意味なのであろう。

つまり、貞観二年（八六〇）、小町が二十歳であった年
の秋に、——小町は、貞樹の心内を確かめようとして、
この歌を詠み送ったのだらう、と推察される。

その当時、小野貞樹が何歳であったのか知る由もないが、
肥後守小野朝臣貞樹は遠かに遠い九州の肥後国にあって、……
都にいる小野小町のことを、深く愛しつづけていたように
思われる。

そしてまた、小町の方も、真実は貞樹を憎からず想って
いたのであろう。

小町の歌には、恋の心がある。好きでもない男に、この
ような歌を作って贈るということはあるまい。

好きだからこそ、小町は、
「言の葉さへに移ろひにけり」
と嘆いているように感じられる。

■なお、群書類従本『小町集』には、
忘れぬるなめりとみえし人に
今はとて我身しくれと降ぬれは
ことの葉さへにうつろひにけり
かへし

5.454¹

112

人を思ふ心この葉にあらはこそ
風のまにまに散りも紛はめ

と記されている。

■また、参考迄に述べると、『伊勢物語』二二一段には、

むかしありける色好みける女、あきがたになる（自分
に厭気がさして来た）男のもとに
今はとてわれに時雨のふりゆけば
言の葉さへぞうつろひにける

返し、紀定文（伝記未詳。小式部内侍本に「きのさねふ
んじ）

人を思ふ心のはなにあらばこそ
風のまにまに散りもみだれめ

とある。（竹取物語・伊勢物語・大和物語「日本古典文学大
系、岩波書店、一八三頁参照）

＊
それにしてもどうしたことが、『肥後守』以後の小野貞
樹の記録は見当らない。（「小野小町」前田善子、三省堂、一
六九頁参照）

＊
或いは、あまりにも清廉で妥協を知らない小野貞樹は、
肥後国の在来保守勢力の反発を招いて、殺されたのかも知
れない。

そしてそれは察するところ、……貞観二年（八六〇）冬十一月二十七日（後任の藤原朝臣眞敏が肥後守となつた日）以前のことであつたらう、と思われる。

• というのは、——『三代実録』貞観八年（八六六）九月

二十一日条に、先述の通りこう記されているからである。

「肥後守紀朝臣夏井^{なつる}配^{はく}土左國^{どさく}。……〔昨年の〕貞観七

年^{とし}拜^{まつ}肥後守^{ひごのり}。母石川氏^{いしかわのうぢ}聞^{きこ}而^{しか}哭^な之^{これ}。人問^{ひとと}其^{その}故^{ゆゑ}。

答^{こた}曰^{いはく}。吾聞^{われきこ}。肥後風俗^{ひごふうぶく}。國宰^{くにさいに}至^{いた}清^{きよ}。身必^{みづか}不^せ全^{ぜん}。吾

子其^{その}不^な終^は乎^か」

• つまり、貞観七年（八六五）正月、紀夏井が肥後守に

任命された時、夏井の母は慟哭し、

「聞くところによると、肥後の風俗上、国司が清廉である

と必ず身を全う出来ないそうです。吾が子もきつと終りを

全うすることはないでしょう」

と嘆いたという。

• 「身必不^{みづか}全^{ぜん}」とは、……「致命傷を負った」という意

味なのであらう。

• 即ち、紀夏井の母のこの言い方から推し量ると、

〈これ以前の肥後の国司の幾人かが、清廉でありすぎたた

めにその身を全う出来なかつた〉

ように理解される。

5.455P

• もつとも、紀夏井の前任者「藤原眞敏」は、この後の貞観十二年（八七〇）二月十四日に刑部大輔に任命されてい

るのだから、……前任者「小野貞樹」以前の数名が、清

廉で死に至つたと解される。

• 紀夏井が肥後守に任命された貞観七年（八六五）正月二

十七日のほんの数年前の清廉潔白な何人かの肥後守（五年

前の貞観二年（八六〇）正月十六日に肥後守に着任した小野貞

樹ら幾名かの者達）が、悲惨にもその身を全う出来ず、……

あまりにも記憶になまなましかつたからこそ、紀夏井の母

は我が子の不幸を予感して哭いたものと思われる。

• 他の国々とは違つて肥後国には、中央政權をも意に介さ

ない独自の気風が受け継がれていたのではなからうか。

• 天地開闢以来の長い長い歴史をもつ肥後国だからこそ、

時の朝廷さえいふくぶん遠慮があつて、力でもって押えつ

けること~~が~~出来ない面があつたのかも知れない。

*

■ それでは、『肥後守小野貞樹』とはどんな氏素姓の人だつ

たのだらうか。

• 小野小町と同姓であるところから、親類であらうとする

説が契沖（江戸前期の国学者・歌人）によつて提唱されて

いる。

けれども、小野氏の系図に貞樹の名は見えず、特に根拠はないようである。

一方、『勅撰作者部類』は、小野貞樹について、「石見王の御子」という。

しかし、『皇胤紹運録』・『大系図』の高階氏の系図石見王の所には、

天武天皇―高市親王―長屋王―桑田王―磯部王―石見王―

丹波山城守神祇伯

〔**峯**〕緒 從四上右中弁

承和十一賜 高階真人姓

と記されているだけであり、また石見王の御子の條にも其の名は見当らない。

とはいえ、もしこれが脱漏であるとするならば、貞樹は

峯緒の弟に当ることとなり、年代としてもほぼ一致する。

あるいは、仁明天皇の承和十一年（八四四）、兄峯緒は

高階氏を賜り、弟貞樹は小野氏を賜った、のかも知れない。

そしてもしもそうなら、小野貞樹と小野小町とは、同族

でないことになる。（「小野小町」前田善子、三省堂、一六八

）一七二頁参照）

■小野貞樹の経歴は、諸書によると、次の通りである。

天順嘉祥二年（八四九）閏十二月九日

「任ニ東宮少進」^一（古今和歌集目錄）

5.456⁷

文德嘉祥三年（八五〇）四月十七日「文德天皇即位の日」

「小野朝臣貞樹從五位下」（文德実録）

嘉祥三年（八五〇）八月五日

「從五位下小野朝臣貞樹^二爲^二刑部少輔^一」（文德実録）

仁寿三年（八五三）十月十六日

「小野朝臣貞樹^二爲^二甲斐守^一」（文德実録）

『古今集』卷第十八雑歌に、この頃の歌一首がある。

斉衡二年（八五五）正月七日

「小野朝臣貞樹從五位上」（文德実録）

天順貞觀二年（八六〇）正月十六日

「從五位上行大宰少貳小野朝臣貞樹^二爲^二肥後守^一」

（三代実録）

つまり、小野貞樹は、仁寿三年（八五三）十月十六日に

甲斐守となり、……七年後の貞觀二年（八六〇）正月十六

日に肥後守となったのだった。（「小野小町」前田善子、三省

堂、一六九―一七〇頁。「古今集」第十八―九三七〈小野貞樹

の歌〉参照）

*

肥後守としての任務を全うしようとする小野貞樹は、肥

後国の保守勢力との激しい抗争に明け暮れる心労の日々を送

っていたとであつたのかも。
のではなからうか

20

500/と南
字Fが3
1字Fが3

860-103
841-119

そんなわけで小野貞樹は、愛する小町に宛てて、気のきいた便りさえなかなか書けなかったのだらう。

そして幾通もの小町からの手紙に対して、返事も出来な

い辛い毎日が更に続いていったように思われる。
だが、心安まることの無い緊張した時を割いて、貞樹は
ようやく一通の文をしたため、都にいる小町のもとへ送り
届けた。

しかしながら、貞樹が切迫した状況の真只中に居ること
など知る筈もない小町は、——その文のあまりのそっけな
さに、心を痛めた。

《私のいとしい貞樹様は、どうなさったのかしら》
ここに小町は、歌を作って、貞樹の心を確かめてみずに
おれなかった。

《私（小町）に厭きておしまいになったのでしょうか》
小町の問いかけの歌に、貞樹は慌てた。
《いいえ、とんでもありません。私はただただあなたを
恋しく思っているのです》

ところが、この返歌が、貞樹の辞世の歌となってしまっ
た。
恋する人が、遠い故郷『肥後国』で無残にも殺された、
——という知らせを聞いた小町の驚きの大きさは、いかば

5.457^p

115

かりであつたらうか。

そして又、全ての経緯を知った時の小町の悲しみは、ど
んなであつたらうか。

「貞樹様は、肥後国で大変な御苦労をなさっておられたの
だわ。そうした事を露ほども知らなかったとはいえ、……
あの時私は、何という心ない歌をお送りしたのでしょ」
小町は、自分のことをこよなく愛しながら帰らぬ人となっ
てしまった貞樹を慕い、胸ふるわせて泣き崩れた。

「貞樹様。私の貞樹さま」

目を泣き腫しながら、小町は、茫然自失の日々を過ごす
のだった。

こうして、数年の時が、瞬く間に過ぎ去っていった。

文屋康秀

平安時代初期の六歌仙の一人である『文屋康秀』につい
て述べることはしない。

(1)『中古歌仙三十六人伝』によれば、「先祖不見」

(2)『勅撰作者部類』によれば、「縫殿助字干の男」

とあり、文屋康秀は一生地下（清涼殿に昇殿を許されない官
人）で終った人のものである。

・『古今和歌集目録』を基にして、その略歴を見ると、

天保和貞観二年（八六〇）三月廿日 任^二刑部中判事^一。

年 月 任^二三河掾^一。

任^二山城大掾^一。

元慶三年（八七九）五月廿八日 任^二縫殿助^一。

とあるだけで、——文屋康秀が三河掾になった年月も不明であり、年齢も亦知る術がない。

●唯一つの手懸りとして、『古今集』巻第一、春歌上、八に、

一條の後の春宮の御息所ときこえける時、正月三日

お前（御前）に召して仰言ある間に、日は照りなが

ら雪の頭に降りかかりけるを詠ませ給ひける

文屋康秀

春の日の光にあたるわれなれど

かしらの雪となるぞわびしき

という歌がある。

これとても確かな年齢は推定し難いのであるが、一條の

后を東宮の御息所（皇太子妃）と申し上げていた時代は、

貞観十一年（八六九）陽成天皇が立太子されてから元慶元

年（八七七）即位される迄の八年間のことであり、御前に

てこの歌を詠み御感あつて幾許もなく山城の大掾の官につ

いたものと推定すると、——この歌は、貞観十八年（八七

六）頃の春に詠まれたものではないかと思われる。

5.458P

歌詞の中に「頭の雪」という語があることによって、も

はや、餘程の老齡と見ねばなるまい。

本居内遠（江戸後期の國學者）は、この時（貞観十八年）、

文屋康秀六十歳と見ている。

そして前田善子氏は、本居内遠のこの仮説にのっとて、

「文屋康秀が三河掾に任官されたのは、貞観五年（八六三）、

四十七歳の頃のことであつたらう」

と推定している。（「小野小町」前田善子、三省堂、一九二

三頁。「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、二〇八頁参照）

この説によれば、

文屋康秀が三河掾であつたのは、貞観五年（八六三）頃

から以降、——元慶元年（八七七）正月十五日（山城大掾

任官）迄の間だつた

ということになる。

■なお、『掾』は、我が国古官制において、地方の第三等

官をいう。（「大字典」上田万年、講談社〈掾〉。第九十五章

〈良実と小町との出会い〉の項。第²⁵⁷表参照）

■また、文屋康秀は、『古今集』卷五——二四九、および

『小倉百人一首』の、

吹くからに秋の草木のしをるれば

むべ山風を嵐といふらむ

（*新や1巻の6番は、114版）

⑤5390エ
小野小町 126頁

上巻末247

111

の歌で知られている。

■ **ともあれ**『文屋康秀』についてはあまりにも不明な点が多い**痕跡**の

● 貞観五年（八六三）、文屋康秀は四十七歳の時に三河掾

となった、

● 同年、小野小町は二十三歳であった、

と仮定してみたい。

*

さて文屋康秀は、三河掾となった頃のある時、——小野

小町に文を送った。

貞観二年（八六〇）の秋（もしくは初冬）に小野貞樹が

死んで、それからというものの失意のどん底に打ちひしがれ
ている小野小町を哀れに思い、慰める**為**……文屋康秀

は手紙を送ったのだろうか。

『古今集』巻第十八・九三八には、こう記されている。

文屋康秀が三河掾になりて「県見にはえいでたたじや」

（私の任国を）視察においでになりますか）と言ひやれり

ける返事によめる

小野小町

わびぬれば身をつき草の根を絶えて
誘ふ水あらばいなむと思ふ

5.459^p

*

解参照

この歌は一見、

「私は悲観して心細く暮らしているのだから、身を憂う思
い（つらく思い）、——根なしの浮草が水の流れに誘われ
ていくように、どこへなりと参りましょう」

という、快諾の意にきこえてくる。

しかし、「あらば」の仮定法を、見のがしてはならない。
「あらば」の仮定法は、「ない」という断定の婉曲表現で

ある。

すなわち、文屋康秀の誘いの言葉を、小町は表向きやん
わりと、だかきっぱりと、

「誘う水があつたら行きましようが、貴方なんかのところ
にはまいりません」

と断わったのである。

また、結句の「往なむ」には、〈拒否する〉意味の「否
（辞）む」が効かせてあるのかも知れない。そのように解

したくもなるほどに、「誘う人があなたでは嫌だ」という
拒絶を、ねばねばと、どっちもとれるような表現で返し

たのだった。（小野小町攷」小林茂美、桜楓社、二〇三〜五
頁。「古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、三五二頁の注

ところで察するところ、三河掾文屋康秀に「私の任国を」視察においでになりますか」と……「あはれ」をかけられた小野小町の心は、いよいよ

はじめになっていったように思われる。

小町は、歌った。

『古今集』には、先の歌（わびぬれば身をうき草の根を絶え
この歌）に引き続いて、——小町の次の歌が載せられてい

る。

題しらす

あはれてふ言こそうたて

世の中を思ひはなれぬほだしなりけれ

人がかけてくれる「あはれ」という言葉こそ『うたて』

（いやなこと）であり、「厩心を沈ませるものであって、

世の中（の悲しい思い出）を思い離れさせない『ほだし』

（手かせ足かせのような、自由を束縛するもの）だったのです

ね。

なお、「けれ」は、そのことに初めて気づいて詠嘆する

意である。（『古今和歌集』日本古典文学全集、小学館、三五

三頁の注解。「広辞苑」へうたてくへほだし（参照）

人はすぐに、「不憫だ」といって哀れがる。

しかし、他人に「あはれ」をかけられた小町は、あは

5.460^r

れをかけられて初めて感じたことながら「……『いやなこと

だ』と思っただのであるう。

心の内の大切な思い出として、そっとしまっておきたい

のに、「あはれ」と言って、むやみやたらに引掻きまわ

されるものだから、世の中の忘れていたい思い出がまたよ

みがえってくる。

「あはれ」という言葉こそ、厭わしい『うたて』（いやな

こと）であり、世の中を思い離れさせない『ほだし』（人

の身を束縛する枷）だったのですね、といった意味であ

るうか。

小町は、「貞樹のことを忘れよう」と務めていた、と推

察される。

『返事』の歌を見てみよう。

わびぬれば身をうき草の根を絶えて

誘ふ水あらばいなむと思ふ

この歌には、……新たな恋を思わせる、かすかな響きが

あるように感じられる。

文屋康秀ではない誰かに、——この時すでに、小町は淡

い恋心を抱いていたのではなかるうか。

つまり、

＜その方がお誘いになる水にならば、喜んで流れて行きた

いのに、……＞

と歌っているように思われる。

そもそも、文屋康秀という＜誘い水＞を前におきながら、

「もしも誘う水があったら」というのは、ひどすぎる（こと

なのである。（「小野小町歌」小林茂美、桜楓社、二〇四頁参

照）

なるほど、文屋康秀には気の毒な歌だが、——しかしこ

のとき小町は、胸の内に揺らめくほのかな恋心と、思うに

まかせないわびしさとを、歌い込まずにおれなかったのか

も知れない。

＜あのお方が誘って下さったのならば、どこへなりとも往

きたいのだけれど、……誘ってくれたのは、思いを寄せて

いる方と違うのですもの、否むしかないわ＞

といった意味をも込めて歌ったように察せられる。

*

とすれば、小町の意中の人とは、一体誰だったのだろう

か。

『古今集』巻第十三、恋歌三、六五六には、次の小町の歌

5.461P

がある。

うつつには、さもなくそあらめ

夢にさへ人目をよくと見るがわびしさ

そして、この歌を収めている群書類従本『小町集』には、

「やむことなき人の忍び給に」

という詞書が添えられている。

あるいは、小町の恋の相手は、おそれ多くも、やんごと

なき尊貴な方であったのかも知れない。

そのため、おいそれとは逢うことすらもなかなかできな

かったのであろう。

そんなもどかしいある日、……やんごとなきその

お方が、忍んでおいでになった。

小町は、心がふるえるばかりに嬉しかった。

「屋の間は人目を忍んでおいでになれないこともございま

しょう。ところがつれなくもあなた様は、夜の夢にさえも

現われては下さらないのです。夢路においても、人の目を

気にしていらっしやると思っ、私は悲しくてなりません

でした。……それなのに何と今日は、夢などではなくて現

実に、貴方様がお見えくださって、夢かと思えばかりに嬉

しゅうございます」（「古今和歌集」日本古典文学全集、小学

館、一六六頁の注解参照）

(二七)

(二八)

小町は、その気持を歌にしたのかも知れない。
やんごとなきそのお方との話もはずんで、小町は幸せの

極みにあった。

*

この歌を詠んでからの小町は、以前にもまして、そのお

方のおいでを心もそぞろに待ち焦れた。

「こんどは、いっお見えくださるかしら」

それにしても小町の歌に、

《夢をうたい込んだものが多い》

ことは、人々の注目するところである。(以下、「古今集」

及び「宮廷を彩る才女」晁教育図書(七九頁参照)

(556) 思ひつゝ寝ればや人の見えつらむ

夢と知りせば覚めざらましを

(558) うたた寝に恋しき人を見てしより

夢てふものは頼みそめてき

恋しい人のことを夢にみた小町の醒めて後の心残り、ま

た夢に見たいという望みが、切なげに歌われている。

(554) いとせめて恋しきときは

うばたまの夜の衣を返してぞ着る

恋しくてどうにもならない時、私は夜の衣を裏返しに着
て寝るのです。(「うばたまの」は、夜・黒などの枕詞)

5.462^P

けれども恋する人をただじと待っているのは、つらく、
悲しいことである。せめて夢の中だけでも、自分の方から

逢に行きたい、と小町は歌う。

(667) 限りなき思ひのままに夜もこむ

夢路をさへ人とはとがめじ

あなたを恋い慕う無限の思いを案内の燈火として、せめ

て暗い夜にでも訪ねてまいりましょう。夢路を通していく

ことまでは、誰もとがめだてをしないでしようから。

夢の中での逢瀬は楽しい。

《一日お逢いすることの方がいい》

との思いはつのる。

(668) 夢路には足もやすめず通へども

うつつに一目見しごとはあらず

夢の中では、足の疲れも厭わずせと通いつづけて、

いつも楽しいひとときを過ごしておりますが、……でもよ

く考えてみますと、現実にはちよつと一目だけお逢いするこ

とほども楽しいものではございません。一目だけでも、夢

でなくお逢いしようございます。

こうして、やんごとなき人とのまだの逢瀬を待ちわびる
焦れったくも心楽しい年月が、夢のように打ち過ぎていっ

た。

*

ところが、小町の心の大きな存在になっていたと思
われるその方が、——とある年の『秋』に、お亡くなり
になってしまったようである。

群書類従本『小町集』の五六番歌として、こう記されて
いる。

四のみこのうせ給くるつとめて風ふくに

今朝よりは悲しき宮の秋風や

又あふこともあらしとおもへは

なお、「つとめて」は「早朝」のことである。例えば、

『枕草子』の冒頭に「冬はつとめて」とあり、よく知られ
ている。

もつとも、江戸前期正保三年（一六四六）版の流布本系
『小町集』（歌仙家集本）には、

四のみこのうせたまくるつとめて、風吹くに

今朝よりはかなしの宮の山風や

またあふ坂もあらしと思へは

とある。

また、神宮文庫本『小町集』（二五番歌）では、詞書が
「四のみこのうせ給くる比、風のふきしに」とあり、初句

5.463^p

が「けふよりは」、二句が「吹風や」とある。
とはいえ徒来から、——一・三・四句を、

「悲しき宮の 秋風や 又あふことも」

とする群書類従本『小町集』の本文に従って、

《秋風の吹くころに没した「四のみこ」への挽歌》

という受けとめ方がなされてきた。（小野小町攷 小林茂

美、桜楓社、三七六、三九三頁参照）

*

ではここに、あくまでも実証のない推定ながら、——

「やんごとなき人」及び「四のみこ」について、

てみることにしたい。（以下、「小野小町」前田善子、三省堂、

一九八〇一頁参照）

この「やんごとなき人」こそ、小町が最も心を傾け盡く

して愛し奉った御方であろう、と小町の歌から推察される。

そしてまた、「やんごとなき人」とは、すなわち「四の

みこ」のことなのである、と思われる。

だが、「四のみこ」がいづれの御方を指し奉っているか、

ということになると、論及する手がかりは見あたらない。

そこで、小町の時代に於て「四のみこ」又は「四の宮」
と称されていた可能性のある御方々を挙げてみることにしよう

史料によろ
日付不明
245年
247-249年
247年

「天皇喚^ニ時康^ニ（仁明天皇の第三皇子、後の光孝天皇）・人康（光孝同母弟）親王等於清原殿^ニ令^レ加^ニ元服^一」（続日

本後紀）

(2) 貞観十四年（八七二）五月五日。

「无品人康親王薨^ス」（三代実録）

(3) 『皇胤紹運録』には、「四品・彈正尹、法名法性・號^ス山科宮^一。又北野親王」とある。

(4) さらに詳しく述べると、次の通りである。（以下、「小野

小町攷^ヲ」小林茂美、桜楓社、四〇九頁参照）

・仁明天皇の第四皇子人康親王は、承和十五年（八四八）

四品に叙され、嘉祥三年（八五〇）に上総太守、仁寿二年

（八五二）に彈正尹、資衡四年（八五七）に常陸太守を兼ね

たが、貞観元年（八五九）二月から高熱におかされて、気

息絶えるほどの状態となり、親王・官爵を辞したい旨を上

表し、許されて同年五月七日出家入道している。『三代実

録』によると、少年の時より大乘道に帰依する意志をもっ

ていたが、今、病と謝して遂に本懐をとげたとある。（貞

観元年五月七日の条）

・『一代要記』に「貞観十四年（八七二）五月五日薨^ス、

年四十二」とあるから、逆算すると、——人康親王が生ま

れたのは天長八年（八三一）、出家したのは貞観元年（八五

よう。

■嵯峨天皇第四皇子『基良親王』

(1) 天長七年（八三〇）十一月三十日。

「基良親王^ニ加^ニ元服^一。拜^ニ謁^一至尊^一」（日本紀略・日本後

紀）

(2) 天長八年（八三一）六月十四日。

「无品基良親王薨^ス。太上天皇（嵯峨）之皇子也」（日本後

紀）

■淳和天皇第四皇子『基貞親王』

(1) 天長六年（八二九）七月十日。

「皇后誕^ニ生^一皇子^一」（日本紀略・日本後紀）

(2) 貞観十一年（八六九）九月廿一日。

「无品基貞親王薨^ス、帝不^レ視^ニ事^一三日。不^レ任^ニ縁葬諸司^一。

以^ニ固辞^一也。親王者。淳和太上天皇之第四子也。母嵯

峨太上天皇皇女諱正子。淳和天皇納^レ之^ヲ。生^ニ三皇子^一。

立^ニ爲^ル皇后^一。親王神姿清秀。誠孝懇至。承和十一年

（八四四）授^ニ三品^一。尋^ニ拜^ス上総太守^一。後病危篤。上

表^ニ請^ス入道^一。許^ス之^ヲ。因^ニ而^一剃頭^ス。受^ニ大乘戒^一。

發^ニ病^一而^ニ薨^ス」（二代実録）

■仁明天皇第四皇子『人康親王』

(1) 承和十二年（八四五）二月十六日。

5.464⁷

時康親王(後の光孝天皇)と良山宗貞(後の僧正遍昭)との深い絆の項

九) 五月七日、二十九歳の時であつたことになる。

* 仁明天皇の第三皇子時康親王(後の光孝天皇)は天長八年(八三二)に出生されたという。
 * その同じ年(八三二)に、人康親王は同母弟として誕生されたのだから。

以上の御三方である。

□ しかし、嵯峨天皇第四皇子『基良親王』は、天長八年(八三二)夏六月十四日に早くも薨去されたので、問題に

照) ならない。(「小野小町」前田善子、三省堂、二〇〇頁参

小町が承和八年(八四二)に生まれたとすれば、基良親王は小町が生まれる前にお亡くなりになっておられたこと

となる。
 □ 仁明天皇第四皇子『人康親王』が、貞観元年(八五九)夏五月七日に出家された時、

町は十九歳であつたように思われる。
 また、人康親王が、貞観十四年(八七二)夏五月五日に薨去された時、

人康親王は四十二歳、小町は三十二歳であつたろうか。

つまり、小町の妖艶な盛りの頃である十九歳から三十二歳にかけて、人康親王は出家の身であつたと推察され

る。

小町が、人康親王に恋心をいだき続けたとは考えにくい。更に、人康親王の「出家」・「薨去」共に夏五月であつて、『秋』ではない。

□ さて、淳和天皇の第四皇子『基貞親王』は、天長六年(八二九)七月十日生まれなのだから、……小町よりも十

二歳とし上だつたと思われる。その姿は清秀であり、心は優しく誠実な方であつた。

(三代実録)

基貞親王は、承和十一年(八四四)に三品の位を授けられ、上総太守になられた。その後(いつか不明ながら)危篤状態に陥り、その直後のことであらうか。土表し、許さ

れて入道となられた。そして、貞観十一年(八六九)の秋九月二十一日に薨去されたという。(三代実録)

すなわち基貞親王は、貞観十一年(八六九)の『秋』に、四十一歳で薨去されたのだつた。

そしてこの時、小町は二十九歳であつたように想察される。なるほど、断定は出来ないにせよ、(1)嵯峨天皇の第四皇

子『基良親王』、(2)淳和天皇の第四皇子『基貞親王』、(3)仁明天皇の第四皇子『人康親王』のうちから、小野小町の恋

869 29才
841 1
28 28

869 41才
829 1
40 40

841
421
12

前 10才

5465

の相手「四のみこ」を選ぶとすれば、——淳和天皇の第四

皇子『基貞親王』であるように思われる。

桓武天皇の孫に当る『基貞親王』（やんごとなき四のみこ）に恋い焦がれて、小町は数多くの歌を詠んだのだろう。

四のみこ（淳和天皇の第四皇子『基貞親王』がお亡くな

りになったのは、……恐らく、貞観十一年（八六九）秋九月二十一日の『早朝』の~~こと~~だったのであろう。

強い風が吹き荒れていた。

小町は歌った。
今朝よりは悲しき宮の秋風や

又あふこともあらしとおもへは

宮（四のみこ）がおかくれになって、今朝からは宮中の其のお部屋が、空部屋となってしまいました。秋風が嵐のように吹いていますが、これからはもうお逢いすることもあるじ（あるまい）と思うと、悲しみで一杯でございます。

（小野小町論」黒岩涙香、朝報社、六七〜六八頁参照）

尚、「秋風」といえば、通常は、秋を「厭き」にかけて、

男女の心の変わることをいう。

しかし、この歌に関しては、二人の心が離れてしまった

ようには考えられない。

5466^p

124

もっとも、小町の恋の相手である「四のみこ」は、嵯峨

天皇の第四皇子『基良親王』（夏六月十四日薨去）、あるいは

は仁明天皇の第四皇子『人康親王』（夏五月五日薨去）のこと

であらうと考える人は、古来、多い。（小野小町」前田

善子、三省堂、二〇〇〜一頁参照）

そうした解釈をする者にとつては、——「秋風」はおかし

しい、ということになるう。

そこで、「秋風」を、「山風」や「吹風」に変えたものと

思われる。

ところで、この三年後の貞観十四年（八七二）夏五月五

日に、仁明天皇の第四皇子人康親王（山科宮）と號され、

貞観元年夏五月七日に出家入道された皇子）が、四十二歳で

薨去される~~こと~~になる。

この折のことを、『当道要集』は、

小野小町此宮の御事をもてはなされて、

いとおしみ深く思はれるにや、

けふきこしかなしの宮の山風に

亦あふ坂も嵐とおもふ

といふいたみの歌を奉られけるとかや。

189^pF

5.467^P

しかし、そんな小町の心も知らぬげに、時は足早に流れるにあまりある。

親王』にも先立たれてしまった小町の悲しみは、……察す小野貞樹が非業の死を遂げたばかりか、四のみに『基貞

*

が作られたように推察される。

今朝よりは かなしの宮の山風や
またあふ坂もあらしと思へは

歌、

版の流布本系『小町集』(歌仙家集本)に記載されている
こうしたこと等があって、後世、正保三年(一六四六)

といふことはのであらう。

つまり、小町は三年前の歌とよく似た歌を作って奉った

八頁参照)

掛けられている。(「小野小町追跡」片桐洋一、笠間書院、六
●尚、「しの宮」に「四の宮」が、「あふ坂」に「逢坂」が

と解される。

●隣接している山科と逢坂とを結びつけての歌なのだろう。

参照)

と述べている。(「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、四二頁

此歌は小町の家集に有と承り候ひき。

125

てゆく。

花の色は 移りにけりな いたづらに

わが身よにふる ながめせしに

物思いにふけり眺めているあいだに、花は長雨にうたれ
て散っていった。花の色も私の美しさも、もはや消え失せ
てしまったのだわ。(「古今集」巻第二十一・二三。群書類従本

「小町集」。「小倉百人一首」)

*「いたづらに」は、第一・二句に掛かっているばかりで
なく、同時に第四・五句にも掛かっているのだらう。

(「小野小町追跡」片桐洋一、笠間書院、一八一・一八七頁
参照)

そしてまた小町は、この世を去ってしまった恋しい人を
しので、長歌を作った。

「葦田鶴の雲井の中に交じりなば」

などいひてうせたる人のあはれなるころ

久かたの 空にたな引く うき雲の うける我身は つ

ゆ草の 露の命も 未だ消えで 思ふことのみ まるこ

すげ……

というのが初めの句である。自分は、物思いのみ繁き此世
に未だ死にも得ず、佳しき月日を送っている、というので
ある。中ほどに、

お5653^P-43・23
群書類従 小町集 68番

恋も別れも 憂き事も 辛きも 知れる 我身こそ 心に
しみて 袖の 浦の 干る時も 無く 哀れなる……

そして終りには、
いつか恋しき 雲の上の 人に逢ひ見て 此世には 思
ふこと無き 身とは爲るべき
とある。

ここにいう「恋しき雲の上の人」とは、即ち小町の恋人
のことである。

小町は、恋しい人の後を追って死んで雲の上に登り、其
の人に逢うことが出来たならば、一切の思いも消えるのに
と嘆くのであった。(群書類従本「小町集」。「小野小町論」
黒岩涙香、朝報社、三六、七七頁参照)

小町の悲しみは、いつまでも、癒えることなくうつ
と続いていた。
『新古今和歌集』巻八―八五〇に、こう記されている。
題知らず(但し、群書類従本『小町集』には、「見し人
のなくなりしころ」という題がある)

あるはなくなきは数添ふ世の中に
あはれいづれの日まで嘆かん

小野小町

5,468^P

126

「生きている人は失せ、失せた人の数はどんどんふえるの
が世の中なのだ。それなのに、ああ、命のはかなさを、い
つの日まで嘆くことであろうか」

なお、歌の背後には、自分もやがて「なき」側の一人に
なるといふ諦念が流れていて、この歌をいつの世にも通じ
る嘆きにしている。(「朝日新聞」平成十年二月二十六日、
〈折々のうた〉大岡信。「新古今和歌集」日本古典文学全集、小
学館、一六八頁参照)

在原業平

しかし、世の中は不思議なものである。
四のみにこに遠慮していた者達が、——いまや《小町の心
をとらえよう》と、次から次へ引きもきらずやってくるの
だった。
小町には、心をときめかさずに、
とおかない気高い気品と
ともに、……そこはかとない愁を帯びて弱々しい、たとえ
てみれば、高貴な女性の病んだ美しさがあった。(「古今集」
仮名序参照)

おそらく、その風情が、時の風流な男達の心を魅了した
のであろう。

だが、小町は自分へ言い寄る人々をば一々に受け流し、

あ54867 ありはるなり
あ54867 ありはるなり
あ54867 ありはるなり

少しも隙間を与えなかつたようである。
小町は、こう歌った。
ともすれば仇なる風に細々波の
靡くてふごと我れ靡けとや

(群書類従本「小町集」)

男を風にたとえ、我が身を波にたとえた歌である。
また、靡け靡けとばかりに言い寄る男が多いので、「と
もすれば」と云ったのである。

(「小野小町論」黒岩派香、朝報社、一九二〇頁。「小野小町
追跡」片桐洋一、笠間書院、一四三頁参照)

「絶世の美女小野小町の心を、誰か奪うことができるだろ
うか」
風流人を自認する男達は、我こそはその心を射とめてや
らうとばかりに、競って小町の歓心を誘った。

平城天皇の孫にあたる在原業平(八二五〜八八〇)も、

そうした男達の一人であった。

『伊勢物語』第二五段には、こう記されている。
むかし、をどこ有りけり。あはじともいはずりける女の、
さすがなりけるがもとに、いひやりける。

5.469^p

5478^p

男に、逢おうともいわず、……かといつて逢うまいとも
いわない女で、情ありげにも見える人のもとに、次の歌を
送った。

「露のおかれた笹の葉を押し分けて帰った朝の袖も濡れて
いた。けれども、思う人についに逢うことさえできないで
空しく引き返し、わが家で泣き明かす夜の袖の方が、もっ
と濡れるものなのだなあ」

この歌は、『古今集』卷十三・六二二によると、在原業
平が作ったものという。

美男で多感な性格であつたといわれる在原業平は、この
日も小町に逢うことさえできず、すぐごとと家へ引き返し、
やるせない思いで泣き濡れたのであるう。第42回(在原業平)

みるめなきわが身をうらと知らねばや
離れなで海人の足たゆく来る

「漁をする人が、海松布の生えない浦だということを知ら
ないで、足を棒にしてしげしげと訪れる。私は人を見る目
(男を見よう、男に逢おうという気持)のないつれない女な
のに、あなたはまだつらいと思ひ知らないから、毎夜欠か

伊勢物語(赤坂)
128~129頁に詳

5.470P

- ・カラー
- ・左頁の上半分に、大きくはみ出して掲載下さい。

・ここが欠けなり → ように、注意して下さい。



第542図 在原業平 (後鳥羽院三十六歌仙繪)

← 原本の右肩に、
こう記されています。

『日本繪巻物全集』三十六歌仙繪、角川書店、昭和42年12月30日発行、45頁参照、128P

さず絶えることなく、足がだるくなるほど通っておいでに

なるのでしうか) (竹取物語・伊勢物語・大和物語) 日本

古典文学大系、岩波書店、二一八〜九頁。「古今和歌集」日本

古典文学全集、小学館、一五六頁。「日本史辞典」東京創元社

〈在原業平〉参照)

在原業平は、平城天皇の孫、阿保親王の五男として、天

長二年(八二五)に生まれ、翌年の天長三年(八二六)に

在原姓を賜って臣籍に降っている。その概略の経歴は、次

のとおりである。

嘉祥二年(八四九)正月七日

无位在原朝臣業平従五位下(続日本後紀)……二十五歳

貞観四年(八六二)三月七日

従五位上(三代実録)……三十八歳

元慶四年(八八〇)五月廿八日

卒(三代実録)……五十六歳

すなわち、淳和天皇の第四皇子『基貞親王』が薨去され

た貞観十一年(八六九)に、在原業平は四十五歳だった。

そしてこの時、小町は二十九歳であつたろうと思われる。

もしかしたら先の歌は、貞観十一年以後あまり年を経な

い頃に作られた——在原業平の片思いの「恋歌」、および

小町の返歌だったのかも知れない。

5471P

なお、在原業平と小野小町とは、『伊勢物語』から想像

して、後世夫婦であつたかのようにも云われているが、定

かではないようである。(「小野小町」前田善子、三省堂、一

九四〜一九八頁。「日本史辞典」東京創元社〈在原業平〉参照)

「美男と美女とを配したい」

そうした人情(願望)から、いわば自然に生じた素朴な

思いなのであろう。(「日本の歴史」③平安貴族、読売新聞社、

一三三頁参照)

ここに、

〈在原業平は、陽成天皇の元慶四年(八八〇)に卒した〉

ということが特筆される。

在原業平は、……後述するような《小町が最も輝いた

時》を知ることなく、没したように思われる。

深草少将(楊の端書)

深草少将が小野小町のもとに九十九夜通つたという悲恋

の伝説は、あまりにも有名である。

「百夜通つて下さい」

という小野小町のところへ、夜ごと夜ごと、四位の深草少

将は通ひつづけた。そして、牛車の櫓(牛車の牛をはずし

令和2(2020)7.7(火)~

5,473^P

H26.1.16

T
7/8

と
いう。 (「小野小町追跡」片桐洋一 笠間
書院 一九九三年十一月五日改訂新版発行
一〇三頁参照)
* ともあれ
13.5^{PM} 1.5^{PM} 口説けると思うのなら 試してみたらど
うでしょう か
と いった返答だったのであろう。